

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第221号

2020年9月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://agape.wjg.jp/encounter>

佐生健光『キリスト教と称名』より (6)

### 語学を学ぶごとし

「キリスト教を学ぶは語学を学ぶがごとし」と、先生は口癖のように言われた。

まず、その習得のためには、今まで得た自分の知識、経験を一切捨てなければならない。外国語の習得のために、日本語の知識や経験をどんなに振り回しても、それは無理というものである。同様に、キリスト教の真理をわがものとするために、自分の知識や経験を振り回しても、それは不可能である。

外国語をマスターするには、まず日本語を脇において、習得しようとする外国語をそのまま飲み込むしかあるまい。日本語と外国語は、文字も発音も文法もみな違うのだから、この方法しかないのである。

キリスト教の真理は、人間の知識、経験に基づくものではない。天上の言葉と、地上の言葉は、外国語と日本語の相違のように、発音も、

文法も異なる。そのうえ、天上の真理は、地上の真理を超越するものだから、ひたすら、人間を超えるものから与えられる真理を受けるしか、方法はないのである。キリスト教を学ぶには、第1にこのような姿勢が必要になる。

第2に必要なことは、毎日欠かさず勉強を続けることである。「量の大小は問わない。毎日続けることである」と小西先生は言われた。

「一週間に一度 I am a boy. とやって、あとは日本語の生活をしていたら、何時まで経っても英語はマスターできない。同様に、一週一度、教会に出席して、あとは自分勝手な生活をしていたら、20年たって、30年たってものにならん。止めたまえ、そんなものは！」と、言われた。外国語を本当にものにするには、真剣にやって10年かかる、いわんや、神の言葉をものにするに於いておや。「何年かかってもよい、へばりつけ」という、先生のお声が聞こえてくる。

## Subservient ということ

英和辞典によれば、「役に立つ」という意味である。

ある説教の時、「今日はほかのことは忘れても、この言葉は忘れるな」と、先生が言われたのを思い出す。その意味は、次のパウロの言葉で明瞭である。

神を愛するもの、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。神は預め知りたまふ者を御子の像に象らせんと預じめ定め給へり。(ロマ書 8・28-29)

「益となる」とは、「救いのために役に立つ」という意味であり、このことをここでは subservient という。

小西先生は「できるだけ長生きせいよ。70 歳になると、分かるようになってくる。私も、昔のことを思いおこして、ああ、あの事もあれでよかったんだな、この事もこれでよかったんだな、と思うようになった」と、感慨ふかげに言われたことがあった。

## Subservient 続き

ところが、70歳を過ぎた昨今、過去を顧みて「凡てのこと相働きて益となるを我らは知る」ということが、ようやく、分かってきたように思う。私も、小西先生のように、あのことも、このことも、中には私には大きなデメリットだと思えたことも含めて、私が救われるために役に立ったのだと思うようになってきた。そしてこれが先生の言われた「Subservient」の意味だと思えるようになってきた。

とすると、Subservient ということを経験した者は、パウロの「御旨により召されたるもの、神に預じめ知られた者」の仲間入りを許されたことになるわけである。そのようなことを臆面もなく思うこの頃の私である。

現世の苦しきは嫌だ、しかし、この世に生きる限り、苦しきは尽きない。だが、それが救いの手立てとなるなら、甘んじて受けよう。これが、キリスト者の現世の苦しみに耐える姿勢となる。先生は、ご利益のない宗教は宗教ではない」と言われた。私たちは、ご利益は求めない。しかし、いつの間にか、こんなに大きなご利益をいただいているのに気付くのである。

## 病者の祈り

以下は、ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩である。故黒崎重彦兄の紹介によるものであるが、キリスト者のご利益を見事に言い表していると、深い感銘を受けた。ここに再録することにした。

### 病者の祈り

大事をなそうとして

力を与えてほしいと神に求めたのに

慎み深く柔順であるようにと

弱さを授かった

より偉大なことができるようにと

健康を求めたのに

より良きことができるようにと

病弱を与えられた

幸せになろうとして

富を求めたのに

賢明であるようにと

貧困を授かった

世の人々の称賛を得ようとして

権力を求めたのに

神の前にひざまづくようにと

弱さを授かった

人生を享楽しようとして

あらゆるものを求めたのに

あらゆることを喜べるようにと

生命をさずかった

求めたものは一つとして与えられなかったが

願いはすべて聞き遂げられた

神の意にそわぬ者であるにもかかわらず

心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた

私はあらゆる人の中でもっとも豊かに祝福されたのだ

## キリスト者の日々の過ごし方

キリスト者の日々の過ごし方については、新約聖書の中にも、いろいろ書かれている。特に、パウロの書簡には、我々のあるべき生活について、具体的に指針が述べられているが、主要なパウロ書簡では、まず、救いの本質について述べた後、「だから」「それ故に」と、そのことが「すすめ」として、書かれている。

小西先生が示され指針、即ち、「自分の目の前に置かれたなすべきことを、全力をあげてなせ」「やりたいことは後回しにして、まず、やるべきことから始めよ」ということも、そのようなパウロの言葉が基となっていることは周知のとおりである。

されば兄弟よ、われ神のもろもろの慈悲によりて汝らに勧む。

己が身を神の悦びたまう潔き活ける供え物として奉げよ、これ

霊の祭りなり。(ロマ書 12・1)

先生は、ご自分の体験に基づいて、このことを我々にすすめられたものであろう。先生は、長いサラリーマン生活を通して、それを体得されたものと思われる。「サラリーマン生活を通して私の信仰が鍛えられた」と言われたことを思い出す。

## 上にある権威に従うべし

日々の生活を通して、どのようにして信仰を維持していくべきか  
ということは、キリスト者にとって大事な課題の一つであろう。その  
ことに関して、私の耳に残っている先生のお言葉を、改めて記してお  
くことにしよう。

「信仰の核心に属すること以外は、できるだけ人に譲れ」と言われ  
たことがあった。私たち、思いにすぎる賜物をいただいた者として、  
これは当然と言ってよい勧めであろう。地上に属するものは、物心す  
べてを譲れ、ということである。先生はサラリーマン時代に、上司の  
言われることがたとえ間違っているとしても、それに従って行動されたと  
いうことである。パウロはロマ書第 13 章の冒頭で「凡ての人、上に  
ある権威に従うべし。そは神によらぬ権威なく、あらゆる権威は神に  
よりにて立てらる。」と言っているが、まさに、それを文字通り実行さ  
れたわけである。何かといえば、人を批判し、社会に対して不平不満  
を言い放つ自分を顧みて、じゅくじたる思いを禁じえない。

## 大志を抱くな

「青年よ大志を抱け」というクラーク博士の有名な言葉がある。小西先生も、青雲の志を抱いて上京された頃、この言葉を何度もかみしめてご精励になられたことであろう。しかし、先生が鎌倉の病院にご入院なさったとき、お見舞いに上がった私に「大志を抱くな、とみんなに言っといてほしい」と言われたのを時折思い出す。まだ、集会が石館先生のお宅の 2 階で行われていた頃であった。私が称名のことを初めて先生からお聞きしたのも、その頃であったのを思い合わせると、あのご病気の期間は、先生の信仰にとって一つの節目となった時であったかもしれない。

## 信仰は聞くことから

先生は東大在学中は、外交官になることを希望しておられたが、やがて天国の外交官を志望されるようになられた。49歳の折、それを実現されたわけであったが、牧師になられてから、毎日曜日の説教は聖書講義に徹せられた。しばしば、「聖書の最も良き解説は聖書そのものである」と言われたが、また、仏教でいう善知識の重要性についても強調されたのである。聖書を理解するには、まず、聖書をよく知っている人から聴くことから始めなければならない。始めから独りで理解しようとしても、独りよがりの解釈に陥りがちになる。という意味のことが、私の耳の奥に残っている。

イザヤいう「主よ、我らに聞きたる言葉を誰か信ぜし」斯く信仰は聞くにより、聞くはキリストの言葉による。

(ロマ書 10. 16-17)

## 聖書

聖書とは、天上の書を地上の言葉に翻訳した書物である、と言ってよかろう。私たちは、天上の書を地上の言葉で読み解いていることになる。しかし、天上の書を地上の言葉で理解したり、天上の真理を地上の言葉を使って説明することは、極めて難しいことである。強いてそれを行なおうとするときは、しばしば、果てしなき不毛の論争が行われる。しかし、パウロは言う。

みだりなる空しき物語、また偽りて知識と称する反対論を避けよ。ある人々この知識を装いて信仰より外れたり。(テモテ前書 6・20, 21)

しかし、天上の言葉を持たない私たちは、地上の言葉のみでこれを理解しなければならない。地上の言葉のうちに、天上の言葉を探さなければならぬ。そのために、善智識が必要であり、そのために、聖霊の働きを祈るしか方法はないのである。私たちにとって、第1の善知識は、小西芳之助先生であることは言うまでもない。そして、先生はしばしば祈られた「聖霊の助けにより聖書の真理を自らのものとせしめたまえ。」と。